

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320058

研究課題名（和文）中国語とその周辺言語におけるダイクシス

研究課題名（英文）

Deictics in Chinese and the surrounding languages

研究代表者

林 徹（HAYASI TOORU）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20173015

研究成果の概要（和文）：

中国語を中心に、日本語、日本手話、トルコ語、シベ語（中国）、ベトナム語、ラマホロット語（インドネシア）におけるダイクシス要素を詳細に検討した結果、ダイクシス要素の用法に影響する要因として、(1) 話し手を基準とした距離や時間、(2) コンテキストの諸特徴 (3) 話し手のとる視点・態度、(4) 地形に基づく空間軸、などを明らかにした。また、ダイクシス要素の機能として発話を実際の場面に結びつけることが基本的であることを示した。

研究成果の概要（英文）：

In this project deictic elements of some Asian languages, such as Chinese (Mandarin), Japanese, Japanese Sign Language, Turkish, Shibe, Vietnamese, and Ramahorot (Austronesian), have been studied. The result shows that the usage of deictic elements may be related to (1) spatial and temporal proximity of referents, (2) various context features, (3) viewpoint of speakers, and (4) spatial axes delimited by topography. It also leads us to the consequence such that the basic function of deictics is to bind utterances to actual contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	11,400,000	3,420,000	14,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：語用論、ダイクシス

1. 研究開始当初の背景
典型的なダイクシス表現に限っても、これまで、その重要性に十分な関心が寄せられてきたとは言いがたい。多くの場合、指示対象が近いから遠いかに言及する程度で、指示詞の詳細

な記述が行われることは稀である。このように、ダイクシスの分析が十分に行われてこなかったのは、現在の言語研究において、発話から抽出され言語外の環境から切り離された「文」を対象とする、文字通りの「文」法

研究が主流であるためであろう。ダイクシス表現は「過去」「現在」「未来」、あるいは「1人称」「2人称」「3人称」のようなラベルを与えられ、それ以上の分析をされないまま文法研究の中で放置されてきたと言える。

申請者は、トルコ語などのチュルク系諸言語のダイクシスを研究する過程で、ダイクシスが、指示詞、人称代名詞、人称接辞、時制接辞などの形式ばかりでなく、他の形式や語の配列にまでかかわっている可能性を考えざるを得なくなった。一方中国語は、こうしたダイクシス表現が多くない。指示詞は2系列のみ、時制や人称標識はまったくない。そこで、ダイクシス表現の乏しい中国語と、その周囲に分布しダイクシス要素の豊富な、チュルク系、満州ツングース系、オーストロアジア系、オーストロネシア系の諸言語、さらには日本語や日本手話を比較することにより、ダイクシスの個別性と普遍性について、新たな発見が期待できると考えた。

2. 研究の目的

言語は、現実の運用を見れば、用いられる環境と不可分の関係にある。すべての発話は、それが発せられる実際の環境と結びついて初めて意味を持つからである。そして、発話とその環境を結びつけるのがダイクシスである。本研究は、中国語とその周辺の諸言語を比較対照することにより、ダイクシスが、個々の発話に具体的意味を付与するだけでなく、発話をコミュニケーションにおいて機能させるために重要な働きを担っていることを明らかにする。

3. 研究の方法

中国語とその周囲の言語について、現地調査によって新たな言語データを収集するとともに、出版物等からもデータを集めてデータベース化した。こうして作成したデータベースに依りつつ、各言語の分析を進めた。各言語の分析結果は、ほぼ2ヶ月に1度のペースで開催される研究会で発表され、メンバーに共有されるとともに、それぞれの担当する言語の分析に活かされた。

4. 研究成果

まず中国語（北京官話）に関しては、ダイクシスと関係付けられていなかったさまざまな文法形式の機能を検討した結果、それらの本来の意味機能が、文が表す事柄や事物を、話し手が視点を置くリアルな時間領域もしくはリアルな空間領域に定位することにあるという点を明らかにした。特に、従来アスペクトを示すとされてきた文法形式がこのような機能を持つことは、文法におけるダイクシスの重要性とともに多様性を示していると考えられる。

このような中国語に関する研究を基盤として、他の言語におけるダイクシス表現についても検討をおこなった。例えば、中国西部から小アジアにかけて分布するチュルク系言語のひとつであるトルコ語においては、いわゆる中称の指示詞について、近称や遠称の指示詞と較べそれが発話時と密接に結びつけられていることを明らかにした。

また、東アジアからシベリアにかけて分布する満洲ツングース系言語のひとつであるシベ語（満洲口語）においては、従来アスペクトあるいはモダリティを表すとされてきた文法形式（多くは補助動詞）の調査をおこない、それらが使われる条件として、発話時における聞き手の知識状態が関係していることが明らかとなった。

東南アジアの言語であるベトナム語には、指示詞に由来する終助詞がある。これまでは、指示詞とは別の語類として扱われてきたが、指示詞の用法の一部と見なすと、シベ語と同様に、聞き手の知識状態の違いを示していることが明らかとなった。また、終助詞の意味は発話時点における話し手の認識に強く結びついており、トルコ語の中称指示詞で見られたような、指示詞の同時性も観察された。

複雑な空間表現を持つオーストロネシア系の言語（例えば、ラマホロット語）の分析からは、話者が居住する地域の地形が直接的に空間表現に反映することが明らかとなった。

中国語自体においても、指示詞を含む名詞句の表現が、話し手からの距離を手掛かりにして指示対象を同定するという指示詞本来の機能に加え、名詞句を構成する要素やその配列により、やはり聞き手および話し手の知識状態や捉え方（個体として捉えるか否か、など）の違いを表現していることを明らかにした。

最後に、日本手話の分析は、話者前面の空間が複雑な代名詞体系を形成しており、ダイクシスが発話レベルのみならず文法のレベルでも言語構造に深く関わる可能性を明らかにした。

以上述べたような各言語におけるダイクシスの分析から、ダイクシス要素の用法を規定する要因として以下の点が確認された：(1) 話し手を基準とした距離以外に、(2) コンテキストが持つ諸特徴（聞き手が指示対象に気づいているか否か、話し手と聞き手の共有知識に含まれるか否か、指示対象が発話場面に

存在するか否か、指示対象が個体か否か、指示対象の近接性、など)、(3) 話し手のとる視点・態度 (1 焦点か2 焦点か、俯瞰的か当事者的か、対比的か否か、など)、(4) 地形に基づく空間軸での位置。しかし、これらの要因は互いに独立しているとは限らず、連関が疑われるものもある。さらに一般的な要因に整理することまでは、今回至らなかった。今後の課題としたい。

ところで、以上で述べた諸言語の分析においては、本研究課題で新たに作成した音声映像データも利用された。研究テーマの性質から、従来から利用されてきた書き言葉のデータ (例えば、文学作品の翻訳をパラレルコーパス化したデータなど) に加え、映像データの利用が必要と考え、本研究課題では映像データの作成とそれを利用した分析方法の開発を、ダイクシス表現の分析自体とともに、主要な目的としたが、以下では、トルコ語のダイクシス表現の分析における映像データの作成と利用について述べる。

(1) 音声映像データのデジタル化

映像はごく普通のビデオカメラを用いて収録した。音声については、当初ピンマイクの使用を試みたが、セッティングに時間がかかる、対話者がマイクを意識する、などの欠点があり、最終的には超単一指向性マイクを使用した。収録した音声映像データは、QuickTime フォーマットでセッション毎にムービー・ファイル化した。



図1：イスタンブルでの録画の場面

(2) ファイル化した音声映像データは、分担して、Transcriber というソフトウェアを使用し、文字起こしした。以下はその例。

- 01 ee sumru hanIm Simdi bunu
- 02 OnUnUzdeki, eee
- 03 UCIU, UU, ters te Seklinde olan, ee
- 04 bir isim verelim ona
- 05 ee, objeye nesneye
- 06 Uzerine
- 07 paralel, ee oturucak ve de ortalayacak Sekilde koyallm.
- 08 teSekkUr ederim.
- 09 Simdi, ee

(3) 文字起こしされたテキストに、再度ムービー・ファイルを見ながら、指差し、眼差しなど、さまざまな言語外的情報をタグとして書き込んだ。なお、当初は ELAN という、ジェスチャー研究でよく使われるソフトウェアの利用を考えていたが、通常よりデータの作成に時間がかかる上に、ソフトウェアの使用にある程度の熟練が必要なため、今回は採用しなかった。以下は、(2) のテキストにタグを付加したもの ({}内がタグ)。

{Deneme CalIsmasI}

- 01 ee sumru hanIm Simdi bunu
- 02 OnUnUzdeki, eee
- 03 UCIU, UU, ters te Seklinde olan, ee
- 04 bir isim verelim ona
- 05 ee, objeye nesneye
- 06 Uzerine
- 07 paralel, ee oturucak ve de ortalayacak Sekilde koyallm.
- {sessizlik; Lego bloklarInIn sesleri}
- 08 teSekkUr ederim.
- 09 Simdi, ee

(4) テキストとタグを含むデータを、KWIC 索引作成ソフトを用いてインデックスを表示させ、分析した。

このようなデータベースを作成することは、今後独創的な発見をするためには不可欠と考えられる。ただし、今回の試みの中で、多くの成果とともに課題も見つかった。まず第1に、ダイクシスを観察するための適切な場面を設定する必要がある。今回は、実際の講義を記録する (中国語)、ナラティブを収集する (シベ語)、2人でやってもらう簡単な共同作業を与えそれを記録する (トルコ語) という方法を試みたが、一長一短がある。また、言語毎に別々の方法で集めたデータは、比較には不向きであった。今後、方法を改善するとともに、それぞれのやり方がどの目的にふさわしいかを見定め、共通の方法でデータを集めることを検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- 1 木村英樹 「「存在文」が表す〈存在〉の意味および「定不定」の問題」『汉语与汉语教学研究』(査読有) 2号, 2011, pp.1-12.
- 2 林 徹 「指示詞の選択から見たイスタンブルとベルリンのトルコ語」『東京大学言語学論集』(査読有) 29号, 2010, pp.17-28.

3 林 徹「トルコ語指示詞の選択における話者の判断のばらつき」『東京大学言語学論集』（査読有）28号, 2009, pp.267-282.

4 森雄一・西村義樹「認知言語学と日本語」『日本語学』（査読無）28巻4号, 2009, pp.14-22.

5 林 徹「トルコ語指示詞 *şu* の特徴」『東京大学言語学論集』（査読有）27号, 2008, pp.217-232.

6 木村英樹「中国語疑問詞の意味機能——属性記述と個体指定」『日中言語研究と日本語教育』（査読有）1号, 2008, pp.12-24.

7 木村英樹「認知言語学的接地理論と漢語口語形態研究」『当代言語学理論と漢語研究』（北京：商務印書館）（査読無）, 2008, pp.270-280.

8 Yoshiki Nishimura. “Metonymy Underlying Grammar”. *ENERGIA* (ドイツ文法理論研究会) (査読有) 33号, 2008, pp.15-26.

9 Tooru Hayasi. “On the distribution of Eynu, a Modern Uyghur-based secret language spoken in South Xinjiang, China”. *Einheit und Vielfalt in der tuerkischen Welt* . (査読有) . 2007. pp.182-192.

[学会発表] (計8件)

1 林 徹「トルコ語の指示詞：2つの近称？」中国語とその周辺言語におけるダイクシス第8回研究会, 2009年12月6日, 東京大学文学部

2 林 徹「「個別言語の理解に繋がる言語学概論」という選択肢」日本言語学会第139回大会（公開シンポジウム）, 2009年11月30日, 神戸大学

3 西村義樹「知覚の言語学に向けて：行為と知覚の関係はどう言語化されるか？」日本言語学会第139回大会（ワークショップ）, 2009年11月30日, 神戸大学

4 木村英樹「現代中国語における存在表現の諸相と『時空間存在文』の特性」日本中国語学会第59回全国大会, 2009年10月24日, 北海道大学

5 西村義樹「ダイクシスと主観性」文法学研究会, 2008年12月13日, 東京大学（本郷）

6 林 徹「トルコ語の指示詞」文法学研究会, 2008年10月25日, 東京大学（駒場）

7 木村英樹「“shei[誰]”・“nage[どれ]”・“shenme[なに]”——中国語疑問詞の意味機能分担をめぐる問題」中日理論言語学研究会, 2008年1月13日, 同志社大学 大阪サテライト

8 西村義樹「文法の中の換喩」日本語文法学会第8回大会, 2007年10月28日, 筑波大学

[図書] (計2件)

1 木村英樹（共編著）, くろしお出版『ヴォイスの対照研究——東アジア諸語からの視点』, 2008, 194pp.

2 西村義樹（共編著）, くろしお出版『ことばのダイナミズム』, 2008, 369pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 徹 (HAYASI TOORU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20173015

(2) 研究分担者

木村英樹 (KIMURA HIDEKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20153207

西村義樹 (NISHIMURA YOSHIKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：20218209

(3) 連携研究者

()

研究者番号：